

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

出会える日まで

鳥越中学校二年

善田 ぜんだ

美音 みね

小学六年の夏のとある日、私は母と兄と三人で美容院に行った。その日は兄が髪をカットしてもらいに行ったのだ。私はただの付き添いで、何となくまわりを観察していたが、思わず目を見張った。兄の髪を切っている美容師が、無駄のない華麗な動きをしていたからだ。そこは、夫婦で経営している店で、店員は二人しかいないが、そのコンビネーションは最高だった。お客さんの希望を聞き、わずか数秒でカットし始めた。どこをどう切って、どうするというのを、わずか数秒の間に頭の中で整理するということは、どれだけすごいことだろうと思った。その日から私の将来の夢は「美容師」になった。

それまでの自分は、何を決めるにもまわりに合わせて、「あの子がそうするならそうしようかな」と軽く考えていた。兄の髪をカットしている美容師の姿を見て、美容師という仕事に一目惚れしたのだ。ハサミがシャキシャキと音を立て、パラパラと髪が落ちていく世界に、まるで吸い込まれるかと思うほど、美容師という仕事は私の胸に突き刺さったのだ。

中学生になると、自分も髪をカットしてもらいに行った。初めての体験であり、美容師の仕事の間近に見ることができるといううれしさと緊張が入り混じった気持ちだった。すばやく、慣れた手つきでカットが始まり、自分の髪は、みるみるうちに変わっていった。カットが終わわり、目を開けたとき、感動、喜び、憧れという様々な気持ちが一気にこみあげてきた。魔法にでもかけられたような、すごくうれしい、ワクワクした気分になった。いつか自分でも、人をこんな風に、魔法にでもかかったように、生まれ変わらせてあげたいと思った。他の人にも自分が体験した気分を味わってみたいという気持ちになった。

中学二年になった今年の夏、妹がもらってきた学校のお知らせの中に、「夏休み職場体験」というチラシがあった。特に気にも留めず、数日があったある日、「美音、これに申し込んでみんか？」と母に言われて、何気なくチラシを見てみると、「ヘアメイク、ヘアアレンジ、美容師のお仕事体験」と書いてあった。少し不安があったが、興味があり、母に背中

を押されたこともあって、行ってみることにした。そのとき、自分はまだ「美容師」という仕事を軽く考えていた。

当日、専門学校金沢美専に向かった。中に入ると、多くの人がいた。皆すごくオシャレだった。そのとき、自分のように夢を持った人がこんなにいるのだと少し焦りを感じた。講演を聞き、美容師になるには多くの経験を積まないといけないということがわかり、美容の中にも様々な仕事があるということも学べた。しかし、いざ体験となると体が動かなかった。自分ひとり、友達もいない中で、女の子が声をかけてくれた。少し気持ちが楽になった。メイクを教えてもらっているとき、迷っていると、さつきの女の子が「これ、どうかな？」と優しくアドバイスしてくれた。そこから少しずつしゃべるようになった。将来この子も美容師を目指しているのだと思い、少しうれしくおもった。

美容師の体験に参加したことで、自分の考え方も少し変わっていった。そう簡単には美容師にはなれない。多くの不安が広がった。母にも、「美容師はお給料が少ないのよ。」と言われた。けれど、難しくてチャレンジしてみないとわからない。そう簡単に夢はあきらめきれないと新たに決意することができた。美容師になるには、いやなことやつらいことも乗り越えていかないとけないと考えるようになった。どの高校にいけばいいかなどの計画を立てて、見通すということをしなればいけないということも考えた。

美容師になりたいという夢は、本当になんかえられないかわからない。いつかこの夢も変わるときが来るかもしれない。けれど、今、自分が追っている夢は、「美容師になること」だ。そしていつか、自分のお店を持つて、家族や友人たちにも来てほしいと思っている。

これからも美容師体験のようなものがあつたら、どんどんチャレンジしていきたい。誰かに否定されたとしても、大きな壁にぶつかったとしても、くじけずにがんばっていきたい。そして、今年の夏に出会った女の子と将来再会できることをひっそりと夢に見て、どんなことにも負けずに夢に向かって突き進んでいきたい。